西村梨緒葉

portfolio

西村梨緒葉
Rioha Nishimura

1996 年生
2014 埼玉県立新座総合技術高校　デザイン科卒業
2020 多摩美術大学　情報デザイン学科メディア芸術コース卒業見込

Exhibition（own works）

2017	個展「期末テストの前に会いたい」	gallery kazane
2018	media lab 有志展	多摩美術大学 情報デザイン棟
2018	グループ展「終終終〜の終」	多摩美術大学芸術祭 情報デザイン棟
2019	メディア芸術コース学外展「ESCAPE」	gallery LE DECO

Exhibition（curation / direction works）

2018	「bombyx mori と第 3 の目のためのスタディ」	キュレーター
2018	「Round on Laundry on Land」	企画構成 / 作家紹介文
2019	メディア芸術コース学外展「ESCAPE」	企画代表 / ゲストトーク企画キュレーター
2020	メディア芸術コース卒展「skippp...p」	企画代表 / ゲストトーク企画キュレーター

Text works

2018	「#OC_HACK project」	宣言文
2018	「終終終〜の終」	展覧会ステートメント
2019	「ボールプール」	タイトル / 作家紹介文

Others

2016	三野新「人間と魚が浜」	制作担当
2018	ENTP「Days are in sync.」	ライブパフォーマンス
2018	「#OC_HACK project」	共同企画 / アプリケーション制作 / ワークショップ運営

人が現実を物語として読むことや、その物語を他人の再生可能な形式でどう語りうるか、ということに関心があります。主に映像やインスタレーション、台本などを用いながら、鑑賞行為をもって、その物語を上演可能にするような語りの形式について、検討、制作しています。

2015 年以降、主にインスタレーション作品や映像作品を制作している。本項目では、制作した作品のうち、鑑賞者の経験に焦点をあてたものを紹介する。

《違う月を見ている》-
《こないだの話》-
《みどり、君はいま》-

また、作品の紹介と並行して、制作に関連した思索や記憶を書き留めた短いエッセイを掲載する。エッセイは、かならずしも個々の作品のコンセプトと直接に対応するものではなく、制作に一貫した関心の流れを読み取れるものになっている。

勘違いについて -
誘惑について - カラオケ性 -
展示と別れる -
ホームビデオと私映画 -
あなたの目の前にいない人について -

出会って、別れる - インスタレーションを経験する時間

《 違う月を見ている 》（多摩美術大学 卒業制作）
2020 / インスタレーション / 机、椅子、おもちゃ、iPhone、30 分の通話音声

台の上で、iPhone が着信音を鳴らしている。鑑賞者は iPhone を手に取り、電話の声を聞くことができる。薄いカーテンの向こうに、部屋のような空間が見える。手に取った iPhone から流れる音声を聴きながら、この部屋を歩き回ることができる。

カーテンを回り込んで進むと、大きな食器棚、食卓、ソファ、カーペットなどが置かれている。周囲の一部分には壁が吊り下げられており、この壁を境にゆるく外界から区切られている。カーペットの上には形合わせの知育玩具、食卓の上にはうさぎの形に飾り切りされたりんごの並んだ皿が置かれている。

勘違いについて

この世界にある大抵のものは、あなたには関係ない。それらは大体他人事で、あなたの生活と交差しないまま過ぎていく。なのに何かを好きになる時、何かを手に入れたくなる時、あなたはそれを「自分事」に思ってしまう。残念ながらそれは勘違いだ。ラブソングを聴いて「これは自分のことを歌っている」と思うこと、雲間から差す光を見て「天からのお告げだ」と思うことから、人と話しているうちに「この人とは気が合う」とか「この人なら自分を分かってくれるかもしれない」とか、ましてや「この人とならやっていけるかもしれない」とか思えてくることも、全ては勘違いだ。だってすべての事実はあなたのために誂えられたものでなく、ただそこにある事実そのものだからだ。

勘違いによって世界が読み替わることは、とてつもない快楽だ。あたかも世界が自分のために回っているかのように世界を読み直し、はじめからそうだったかのように語り直す。そうやって人は、世界からそっくり意味を奪ってしまえる。それはものすごく傲慢なことで、暴力的ですらある。だけどその勘違いは、また救いでもある。自分のことを歌っているようにしか思えないラブソングも、運命みたいに話の合う人も、すべて勘違いだったとしてもやはり、主観的に見て救いであることには変わりない。私をそれを咎めることはできない。だって人は勘違いしかできないのだから。

1.

……もしもし、もしもしー？今どこ？

あ、今どこにいますか？

なんかあの、私、ものを探してて。

で、あの耳につけてますか iPhone、

耳につけて、そう……

耳から離すと、私の声も聞こえなくなって、

そしたら……あなたもいなくなる。

でも、私は話すことしかできないし。

それは全部あなたの自由。

わたしのこともそうですよ。

……だって、

あなたに見えるものは全部、あなたのものですから。

だけどいいですか、

私とのことは、どうか秘密にしてください。

あなただけ、じゃないと意味がないんです。

これは私たちの関係を、いや、

だから少し、付き合ってもらえないかなあ。

……もちろんだけど、

束縛はしません。ていうかできません。

あなたの目の前にあるものは、見たり使ったり、

この世界を……守るための約束なんです。

…だけど、死ぬのはいつも、私ばっかり……

（ノイズ）

あれ？…

《 違う月を見ている 》
電話音声のスクリプト

PEN ART!
apanese Painting
il Painting
intmaking / Sculpture
eramic, Glass, and Metal Works
Graphic Design / Product Design
Textile Design / Environmental
Design / Information Design
Art Science / Integrated Design
Scenography Design / Opera
and Dance
Tama Art University
Open Campus 20

2.

……(ノイズ)

……

……もしもし？あれ？

なんか勘違いしてますか？

勘違いしてますか？

……まだ聞こえる？

あの……聞こえてるつもりで話しますね。

その、お願いをしてもいいかな。

まあ、どういうつもりでも、

あなたがわかってくれたらいいんです。

……iPhone のケースは、緑だったと思います。

あれ、ピンクだったかな、

いや、ピンクじゃないな、わたしピンク嫌い。

緑はなんか……似合うって言われた。

なんか緑に似てるらしいです私。

緑に似てるって……どういうことなんですかねえ。

……私あれなんですよ。iPhone 落としちゃったんですよ。

私の iPhone ですよ、私の。

……とったらダメですよ、

いや、そんなつもりじゃないかな。

それってつまり……どういうつもり？

3.

ていうか あっ、コイン。

コインです。

マレーシアの、なんだっけ、

マレーシアのコインです……

その、コインをね、

なんか、一緒に置いてきたのたぶん iPhone と。

だから探したいの。

すこし、付き合ってもらえないかなあ。

コインって、コインていうか小銭ってさ、

だいたいソファの下とかにある。

あとは自販機の下とか。噴水の中とか、

それから……財布の中とかね。

コインは、なんだっけ、

リン、リンゴ……リンゴ？

みたいなやつです。

そのリンゴみたいなコインが、

iPhone からは、女性の声が聞こえている。女性は、iPhone を失くしたらしい。困っている様子だが、それでもどこか気散じぎみだ。iPhone と同時にコインも失くしていて、それも探したい、と話を続ける。

- 3.

あっ……リンゴ食べますか。

なんか食べたくなってきたリンゴの話してたら。

食べていいかなあ。

誰も見てない。

いただきます。

4.

りんごの切り方を思い出します。

1. まず、ウサギを 8 匹に増やします。

あれ、こんな感じだったっけ？

2. それから、うさぎのお腹を削ります。

勘違いしてますか？

3. それから、耳を切り離します。

皮の下に包丁を入れ、て……

……あ……、

血が出てる……

痛い。

指切っちゃった……

紙で切った傷って痛いですよね。

でも今絆創膏もティッシュもなくて……

だからなにっていうか、

なんだろう……

あ、寒くないですか？

もう少し、付き合ってもらえないかなあ。

5.

私、カラオケ好きなんですよ。

たまに見つけるの、

私みたいな曲。

これ、私が歌うための曲じゃん、っていう。

私に歌ってほしい、って思ってるんですよ。あの曲は。

で、自分に思いっきり酔うんです。

私の曲を、私の声で歌い直す。

酔ってるからもういいの。

だらしないですか？

酔いすぎは良くないって言うつもり？

でも、楽しいですよ。

私に見えるものは全部、わたしのもの。

……あ、ごめんなさい、

まだ聞こえてる？

よそ見してた。

待たせちゃいましたか？

6.

～（つきがとっても、あおいから～、）

～（とおまわりして、か～えろ、）

～（ふんふんふんふ、ふ～ふんふ、）

～（な、み、き～じいは～あ、）

～（、おもいでーの、こみーちよ、）

～（うで～をやさしく、くみあーって、）

～（ふーた～あり、きーり～で、）

～（、さ～あ～、かえろ～、）

はやくしないと、夜になっちゃう。

私もう、どれくらい歩いたんだろう。

足がつかれて、このまま寝ちゃいそう。

時間大丈夫ですか？

誰か待ったりしてたら、ね……

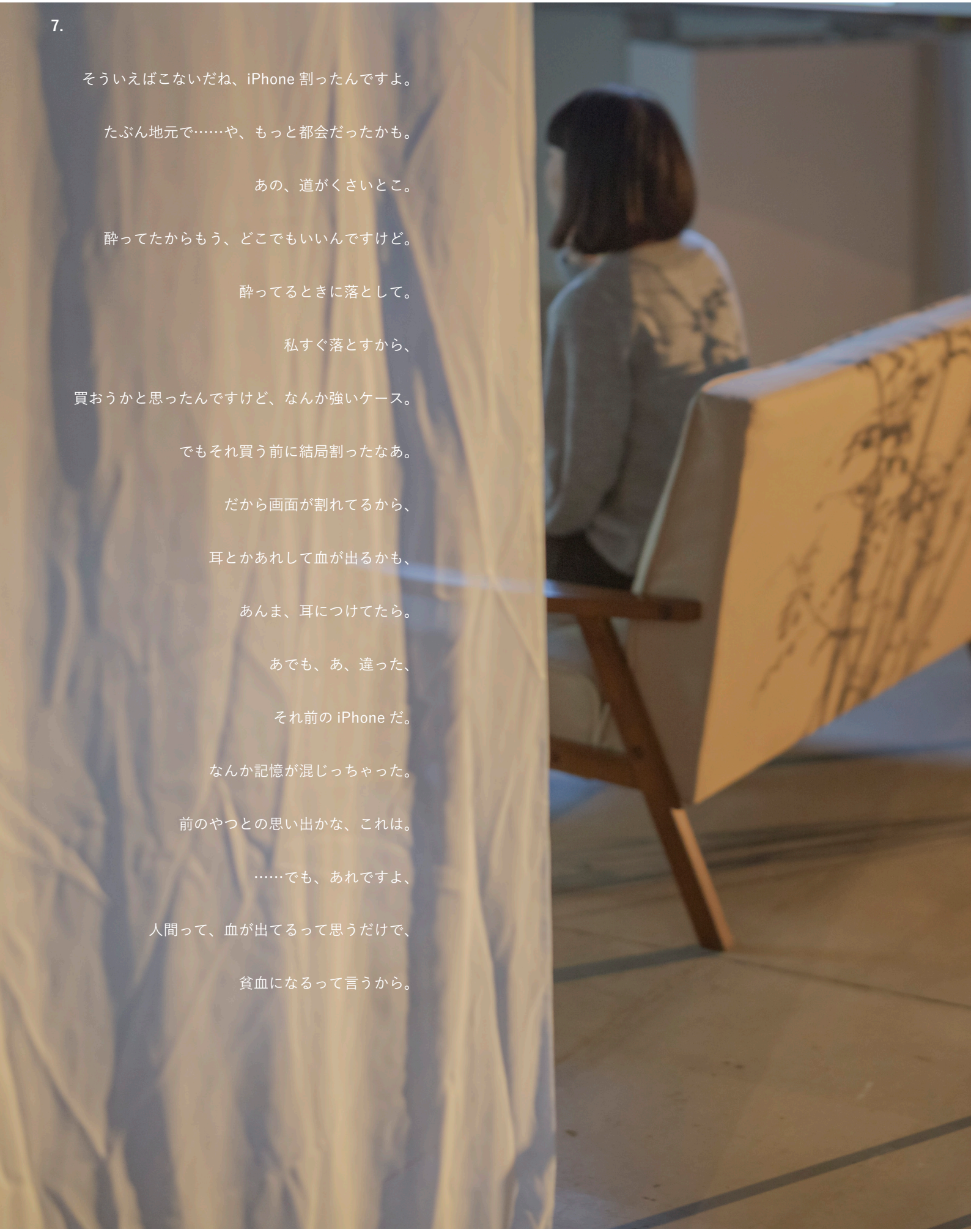
次の満月っていつだっけ？

……

誘惑について - カラオケ性

カラオケは、既存の歌を消費者自らが「歌い直すこと」を趣旨とした娯楽である。その歌を聴くことと、自分で歌い直すことは、ひとつの歌を元にしていてもまったく違う経験だ。オペラ歌手は歌うことで役を上演し、ロックシンガーは歌うことで主張を伝えた。歌と歌手が結びついているかぎり、そこで歌われる言葉は多くの場合、歌唱者による上演や発話行為として鑑賞される。しかしカラオケでは、消費者みずからがその歌を上演する立場を担うことになる。カラオケという娯楽は、他人の作品の意味を読み替え、自分の発話行為や上演として使用する、という構造を持っている。

カラオケのランキングは、売れている曲のランキングと少し違う。作品の意味を奪って自分のものにしてしまうことは、やはりすこし、傲慢なことだろう。しかしカラオケのランキングに入る楽曲の中には、そういった用途を想定して作られたものが存在している。カラオケや結婚式の二次会で特定の歌を相手に向けて歌うことがコミュニケーションとして成立しうるのは、その歌詞が、カラオケ的使用を誘うように書かれているからだろう。歌詞の中のモチーフや、「あなた」という言葉は、あなたの記憶の中の文脈やあなたの声を借りて、歌われるたびに新しい意味で立ち上がる。そうした作品に宿る、人々を傲慢さへ誘惑する性質を「カラオケ性」と呼びたい。



7.

そういえばこないだね、iPhone 割ったんですよ。

たぶん地元で……や、もっと都会だったかも。

あの、道がくさいとこ。

酔ってたからもう、どこでもいいんですけど。

酔ってるときに落として。

私すぐ落とすから、

買おうかと思ったんですけど、なんか強いケース。

でもそれ買う前に結局割ったなあ。

だから画面が割れてるから、

耳とかあれして血が出るかも、

あんま、耳につけてたら。

あでも、あ、違った、

それ前の iPhone だ。

なんか記憶が混じっちゃった。

前のやつとの思い出かな、これは。

……でも、あれですよ、

人間って、血が出てるって思うだけで、

貧血になるって言うから。

8.

もう少し、付き合ってもらえないかなあ。

～（ふふふ、ふんふふ、ふふんふふ～）

～（ふーふ、ふんふふ、）

まだ聞こえてる？

さいきん月が近い気がします。

満月の日、人間はわるくなるって。

もう知ってましたか？

9.

～（つきがとっても、あおいから～、）

たとえば……まあ、たとえばですよ。

私たち泥棒で、どこかに忍び込むときに。

間取りとか、その部屋を先に見るでしょ。

ここから入って、ここを歩いて、みたいなつもりで。

でも、家を買う人は、

そんなつもりで間取りとか部屋とか、見ないでしょ。

何が見えてますか？

……居心地いいですか？

でも、わたしが犯罪者のつもりなら、

いつかはここから逃げるよね。

10.

ね。

猫。

こ……こうもり……いや、こうもり傘。

坂道。

地下鉄。

つ……月がきれいですね。

ねずみ。

右の引き出し。

しらふ。

フライドポテト。

11.

と……ときどき思うことがあって。

どんな迷路も、

左手を壁につけて歩いていけば

いつか出られるんです。

べつに……何かを言いたいわけじゃないんだけど。

逃げるときはいつも一人だよ。

さ、出口まであと少しです、

……6……

……5……

……4……

……3……

……2……

……1……

12.

あ、ていうか、

これはもしもなんですけど、

私、ひとつ心当たりがあって

私ね、あなたのいる場所わかるかもしれないんですよ。

なんか、ここかなって思う場所があるんです。

べつにそんな、

特別な場所ってわけでもないんですけど。

……もし、もしですよ、

もし合ってたら、私、迎えに行こうかな。

そしたらその時あなたは……

横断歩道を、信号が青になったその瞬間、

ちょうど渡れるように、道を歩くんです。

赤のまま渡るのはダメですよ。待つのもダメ。

青になった、その瞬間です。

それを見つけたら、

あなたを乗せてドライブに行こうかな。

まあ私免許持ってないんだけど、

その時までには取れてるんじゃないかな。

……じゃあ、そういうことで。

展示と別れる

展示を見に行って、部屋を出るのが無性にさみしくなることがある。むかし、それまで名前も知らなかった陶作家の回顧展を一人で見に行ってみたことがあった。作品を時代順に並べた、スタンダードな作りの回顧展だった。

序盤に並んでいた作品は、正直全然わからなかった。私にはまだ早かったのかな、とか思いながら順路を進んでいくと、ひとつのモチーフが繰り返し登場する時期がはじまった。作り方をたくさん試して考えているように見えて、作家の姿まで見えてきたような気がした。代表的な作品のシリーズはそのあとからだった。一定の、手のひらに乗るようなサイズで、すごい数のモチーフをどんどんと作っていた。どれもかわいらしくて、ひとつひとつ見るのがうれしかった。次はどうなる、次はなにが来る、と、連載を読み進めるみたいに順路を進んで行った。

とつぜん年表が現れて、作品は途切れてしまった。年表は走馬灯みたいだった。そうだった、これは回顧展で、作家はもうこの世にいないのだった。新作がもうないこと、物語の続きがないことが無性にかなしかった。夢の中で会った人に、目が覚めたらもう会えないのに似ていた。この部屋を出ると物語は終わりで、あとは思い出すことしかできない。それはたしかに、別れなんだと思う。

13.

～（ふふふ、ふんふふ、ふふんふふ～）

忘れものないですか？

14.

……いや、ね、

もう終わりだよ。

どうするつもりだった？

もう遅いかな。

まだ……

でも、ほんとはまだ、話すことがあって、

でもちょっと、疲れてきちゃった、

はやくしないと、……

～（つきもあんなに、うるむから～、）

～（とおまわりして、か～えろ、）

～（も、う、きょ～う、かあぎいり、）

～（あ、え、ぬ～とおも～、）

聞こえてる？
聞こえてる？
まだ聞こえてる？

読まれるたび、再生されるエピソード

《 こないだの話 》

2018 / インスタレーション / 写真、映像 (3min x 18)、iPhone、台本、ビニール袋、ビニール傘、他

大判で印刷された写真が吊られ、ゆるやかな動線が作られた空間。6 台の iPhone が吊られ、映像が流れている。それぞれの iPhone の周囲には、映像に関連するオブジェクトがいくつか置かれている。順路の終わりらしき位置の足元には、封筒がばらばらと落ちている。

映像はそれぞれの iPhone ごとに、複数のものが毎回ランダムに選ばれて再生されているようだ。内容は、カメラを手に持った撮影者が、誰かと話しながら歩いたりしているものだ。ひとつの iPhone から流れる映像は、同じひとつの台本をもとにしているが、同行者や撮影時間帯の違うものが複数ある。

一つめの iPhone では、柔らかい口調で高い声の男声の同伴者と話しているかと思えば、二つめの iPhone からは、低い声でぼそぼそと話す同伴者の声が聞こえる。映像はたがいに同期しておらず、空間にはつねに複数の声が流れている。

1.

『全然懐かしくない』

「あの時はあっちでしょ、」

『あー見たような気がする、、』

「お」

（誰もいない道路）

『おー、』

（写真を撮る音）

「見して」

（ブレて地面が映る）

『暗いね』

「目だと見えんのにね」

「（咳き込む音）……喉いてー」

『風邪引いたの？』

「風邪っていうか　いや風邪なんだけど

声枯れたから長引いてる」

『のど飴あるよ』

「まじ」

（ポケットを探る同伴者）

『いる？』

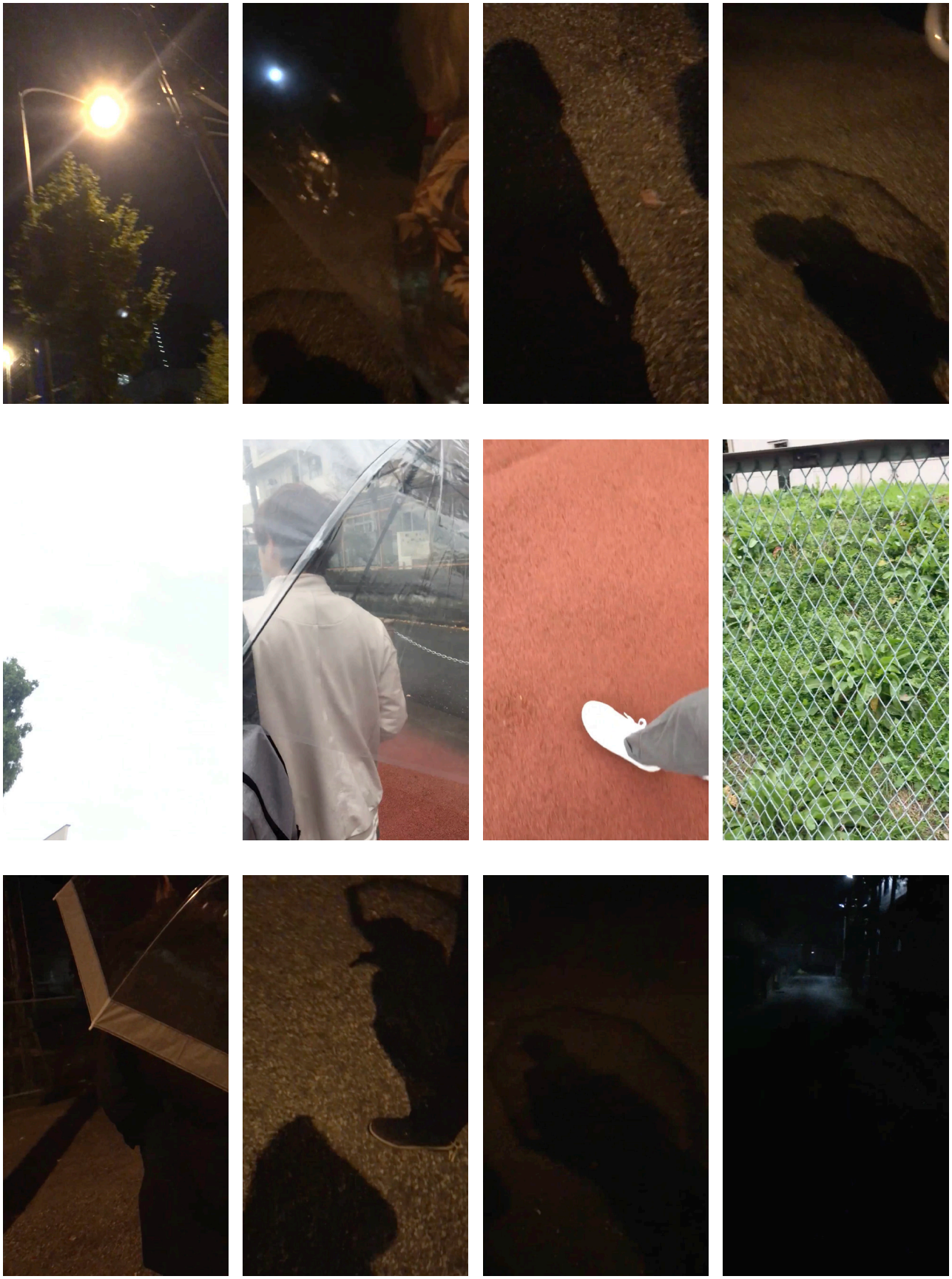
「え、、、ありがとう」

（飴を持った手）

「もらいました」

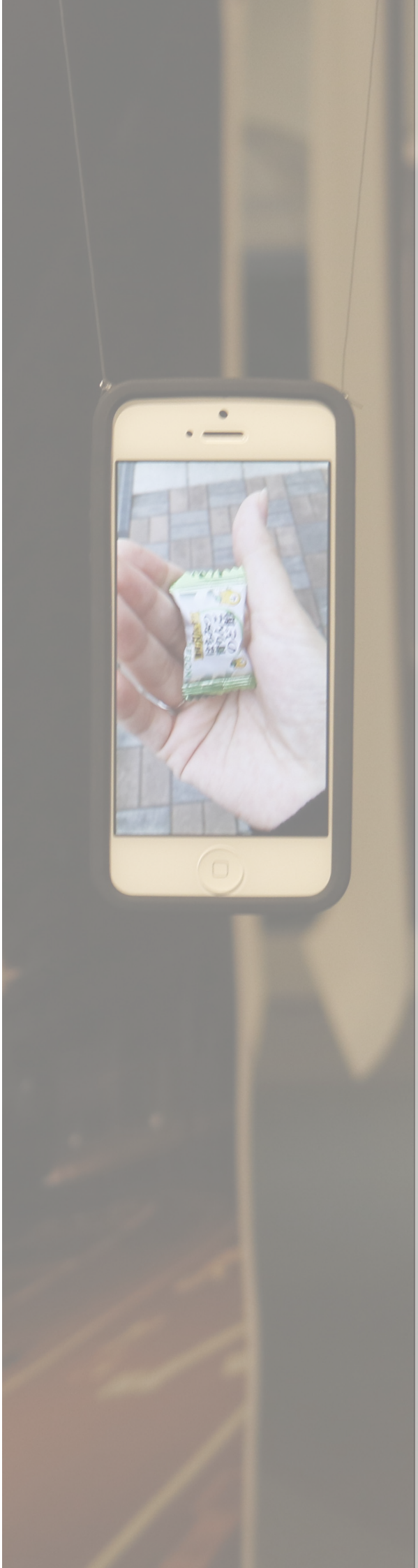
二人は散漫な会話をしながら、なにかを捨てるための場所を探しているようだ。ビニール袋が風でカサカサと鳴る音がずっと聞こえている。

映像の中で、撮影者が同伴者に飴を手渡されている。同伴者の違うバージョンの映像では、手渡されている飴の種類も違うようだ。iPhone の手前には、映像のひとつに映っているものと同じ種類の飴が吊るされている。



《 **こないだの話** 》

映像スクリーンショット

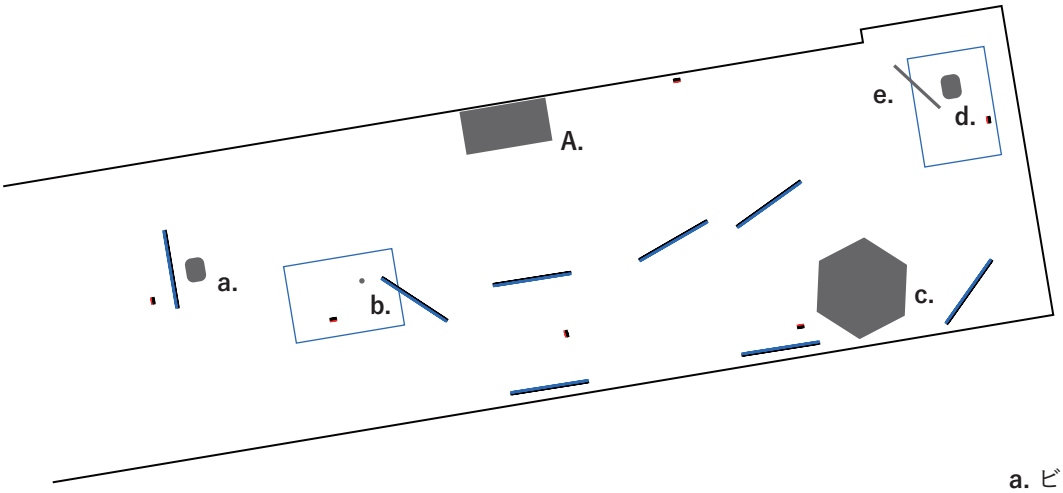


ホームビデオと私映画

中学時代、縦型の小さなカメラを持ち歩いていた。学校からの帰り道、友達と話しながら自分視点の映像を撮るのが好きだった。中学生でいる期間は限られていて、この景色はいつか見られなくなる。ふだん通りの会話も映像に撮って残したら、10年とか経ったあと、映画みたいに鑑賞できるんじゃないかと思った。

高校生のとき、映像部に所属していた。部活動の一環として、制作した短編映画をコンテストに応募したりもした。高校生が制作した映画のコンテストである「映画甲子園」の応募作は、Youtubeで閲覧することができる。応募作の中には、もはや独立したフィクションとしては鑑賞しがたいような出来のものが沢山あった。おもしろみの判断に客観性が欠けていて、どうしても高校生の生活や、監督や役者の自意識や、制作に至った「ノリ」のようなものが透けて見える。そういう映像が、映画作品として公開されている。私はそれが、「私映画」みたいな感じがして好きだった。フィクションとしては穴だらけの映画から、どこかの高校生たちのリアリティを鑑賞できるような気がした。

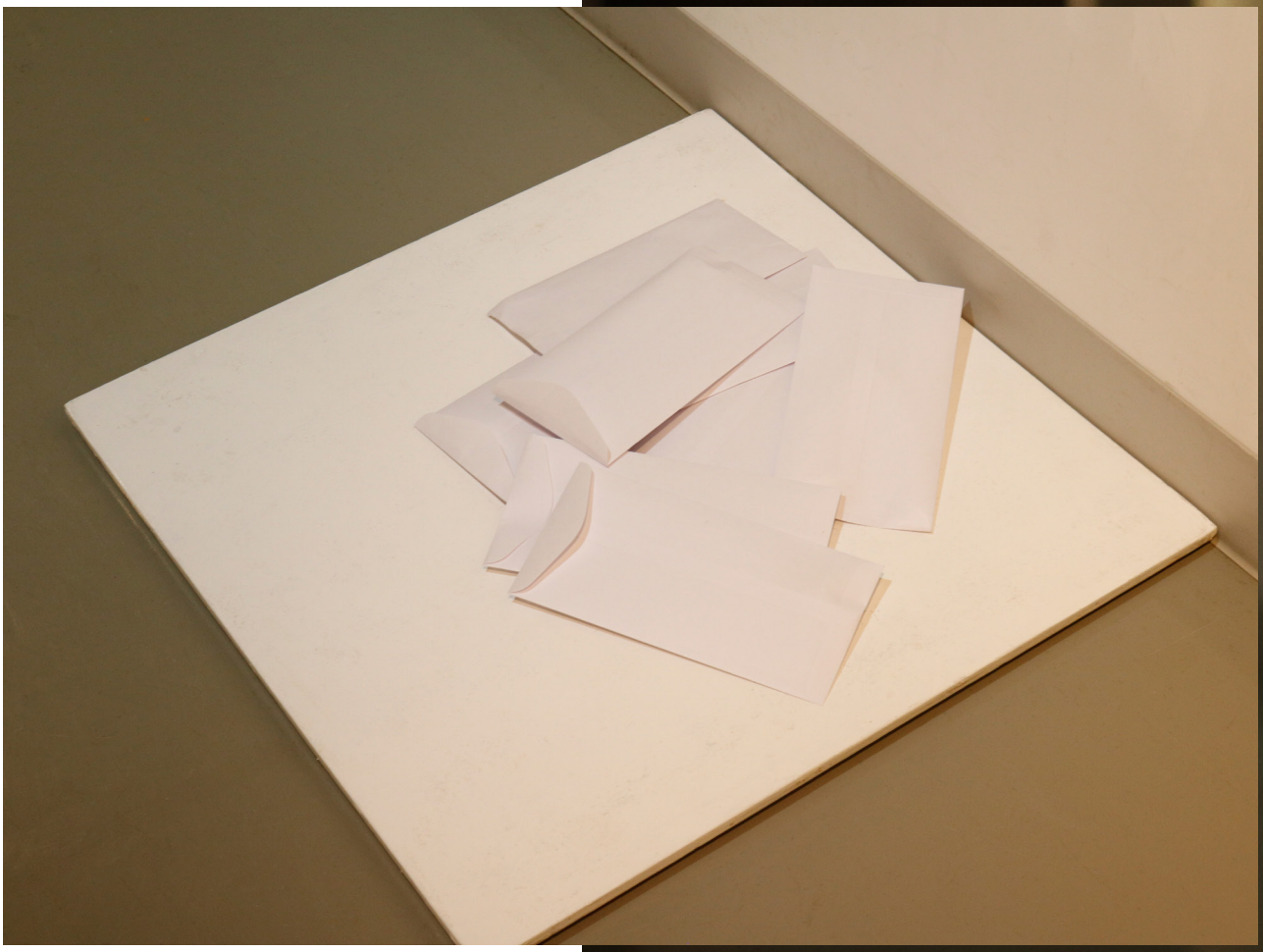
帰り道にカメラを回すこと、役名を俳優と同名にして演じた即興劇を撮影すること、当て書きで脚本を書いて映画を撮ること、instagramのストーリー。撮られたものは、演じられたものとして見ることができる。「撮影」というプロセスは、現実とフィクションの境を飛び越えさせてくれるように思える。



a. ビニール袋
b. 飴
c. ビニール傘
d. 逆さに吊ったビニール袋
e. 枝
A. 封筒

《 **こないだの話** 》
展示マップ

落ちている封筒の中には、飴が一つと、台本が入っている。飴や台本の種類は封筒ごとに違っている。



1/2

1.

『全然懐かしくない』

「あの時はあっちでしょ、」

『あー見たような気がする、、』

「お」

誰もいない道路。

『おー、』

（写真を撮る音）

「見して」

（ブレて地面が映る）

『暗いね』

「目だと見えんのにね」

「（咳き込む音）……喉いてー」

『風邪引いたの？』

「風邪っていうか、いや風邪なんだけど……声枯れたから長引いてる」

『のど飴あるよ』

「まじ」

ポケットを探る同伴者。

『いる？』

「え……ありがとう」

飴を持った手。

pattern:A 1/2

1.

「でしょ？取ってないんだよ……でもノスタルジーでしょ？」

『全然懐かしくない』

「（笑）……地元じゃないからね、」

『うん』

「でもあれでしょ？前やったときはもっとあっちの……あっちの方でしょ」

奥を示す指。

『あー、まあ見たような……うん見たような気はする』

「お、ここ良いんじゃない？」

『おう、……ここ？』

「あっちの」

同伴者が写真を撮る後ろ姿。

「見して、」

撮った写真が映っているiPhoneの画面。

「あー……（笑）」

『暗いね』

「うん、目だと見えるけどね」

「（咳き込む）……喉痛い」

『風邪引いたの？』

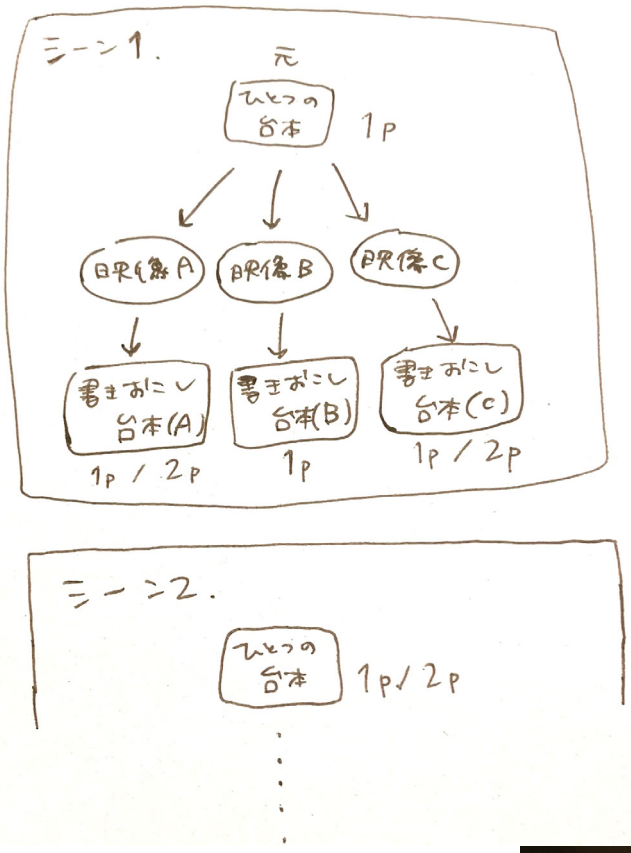
「うーんいや風邪、まあ風邪は風邪なんだけど、」

『俺飴、持ってるよ』

《 こないだの話 》

封筒に封入されている台本の一部

封筒には、6シーンぶんある台本の、多数存在している断片の中からランダムに選ばれたものが、2種類封入されている。台本はひとつのシーンにつき、撮影時に共通して使われた1つの台本と、撮影された映像を書き起こして作った台本が同伴者3人分、合計で4パターン存在している。また、長いものは複数のページに分割されている。

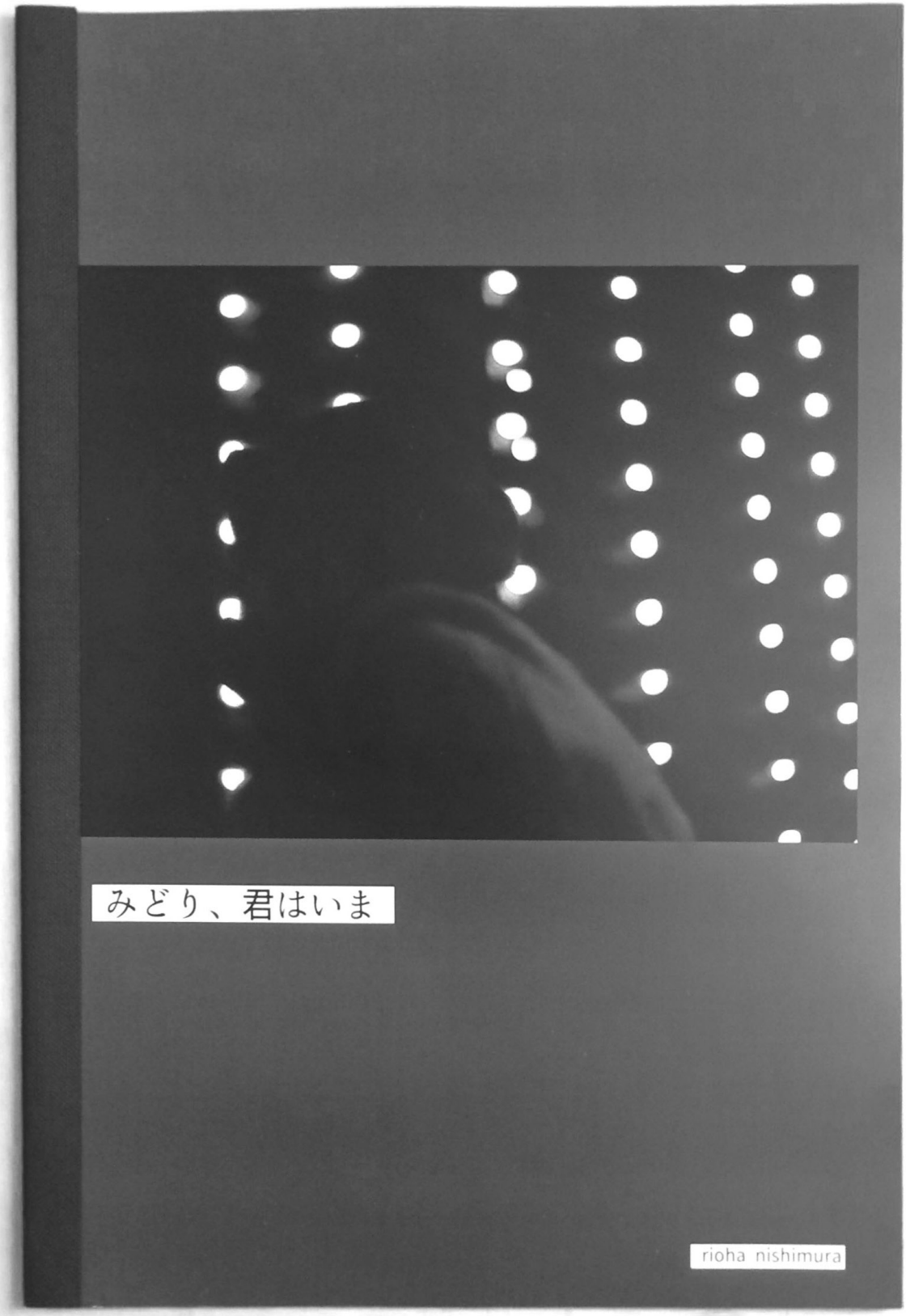


架空の人物 - 物語を追う

《 みどり、君はいま 》

2016 / ビジュアルブック、インスタレーション

フィールドワークでの拾得物を起点にしたプロジェクト。リサーチ、インスタレーション、ビジュアルブックを含む。現場検証に見立てたフィールドワーク、そこで見つけたメモを起点としたリサーチ、架空の人物をモデルとしたポートレートに加え、さらに一連で集まった素材をもとに、回遊型のインスタレーションを制作した。展示後に、それら素材にインスタレーションの記録写真も加え、あらためてビジュアルブックを制作した。



《 みどり、君はいま 》

ビジュアルブック

「みどり、

君は、

今」

マクマーティン保育園裁判

ウィキペディア

あなたの目の前にいない人について

会えない人は、キャラクターに似ている。現在の時間に生きているというのは、更新され続ける、今まさに作られ続けている、ということだと思う。今まさに見えている、声が聴こえている人の印象は、今まさにあなたの中で作られ続けている。だから変わり続けてしまう人間の身体は、ずっと現在に縛られている。いくら想像をめぐらせても、更新され続けるのは想像をする現在のあなただ。ただ目の前にいない、声が聴こえない、というだけで、あなたと彼 / 彼女の時間はすっかり切り離されてしまう。

キャラクターは、過去か未来にしか存在できない。着ぐるみの中の身体とキャラクターを切り離せないとき、見えているそれをキャラクターそのものと言い切れるのか、私にはまだわからない。彼 / 彼女らはたぶん、現在の時間に生きる身体を持てない。架空の存在である彼 / 彼女らは、「設定」として予言される未来か、「作品」として再生される過去にしかいないのだ。

会えなくなった人の性格について、過去形で話すことが好きじゃない。たしかに、彼 / 彼女のふるまいが更新されることはもうなく、見ることができるのは過去だけだ。だけど、つい昨日とかに別れたばかりなら、あなたの中にはその「設定」が残っているはずだと思う。身体に縛られている私やあなたは、キャラクターと同じ時間を生きることができない。だけど、会えない人のいる時間は、キャラクターのいる時間に似ている。

多要素を組み合わせた作品――インスタレーションやビジュアルブックなど――のほかにも、いくつかの小作品を制作している。大規模な作品につながる実験であると同時に、あらたな制作方法を模索するものでもある。

《話す声が書く文が話すあなたの声が》-
《「終」についての手紙 》-
《コーヒーショップで電話をしたらいけないのは、電話の向こうにいる幽霊のことをみんながこわがっているから》-
《Days are in sync.》-
《ばみられたロビー》-

書き方／話し方が、かれらを作り変える

《 話す声が書く文が話すあなたの声が 》

2018 / 映像 (3'00") / 映像、ループされるたびに合成される字幕と音声

二人組が雑談している映像に、字幕と声が合成されている。映っている二人は、互いの印象や、共通の友人、SNS でのふるまいについて話している。再生されている映像は、画 / 字幕 / 声のレイヤーに分かれており、ループする毎にいくつかの素材が組み替わる。

A :　……あんまりね。あんまり、こういうの、
深く考えないもんね。

B :　そうだね。

A :　何となくでやっているけん。

B :　褒められるの、めっちゃ好き。たかちゃん、
めっちゃ褒めてくれるからさ、何か、話、
聞きたくなっちゃう。えっ、もっと、
もっと褒めて、えって。

A :　褒めるというか、まあ、何か、
そういう感じだもん。
そういう感じがするって感じの。

B :　ツイッターのさ、名前も、ちょっと、あれやん、

A :　あんまりこういうの深く考えないもんね

B :　そうだね

A :　なんかなんとなくでやってるけどまぁ ...

B :　褒められるのめっちゃ好き！

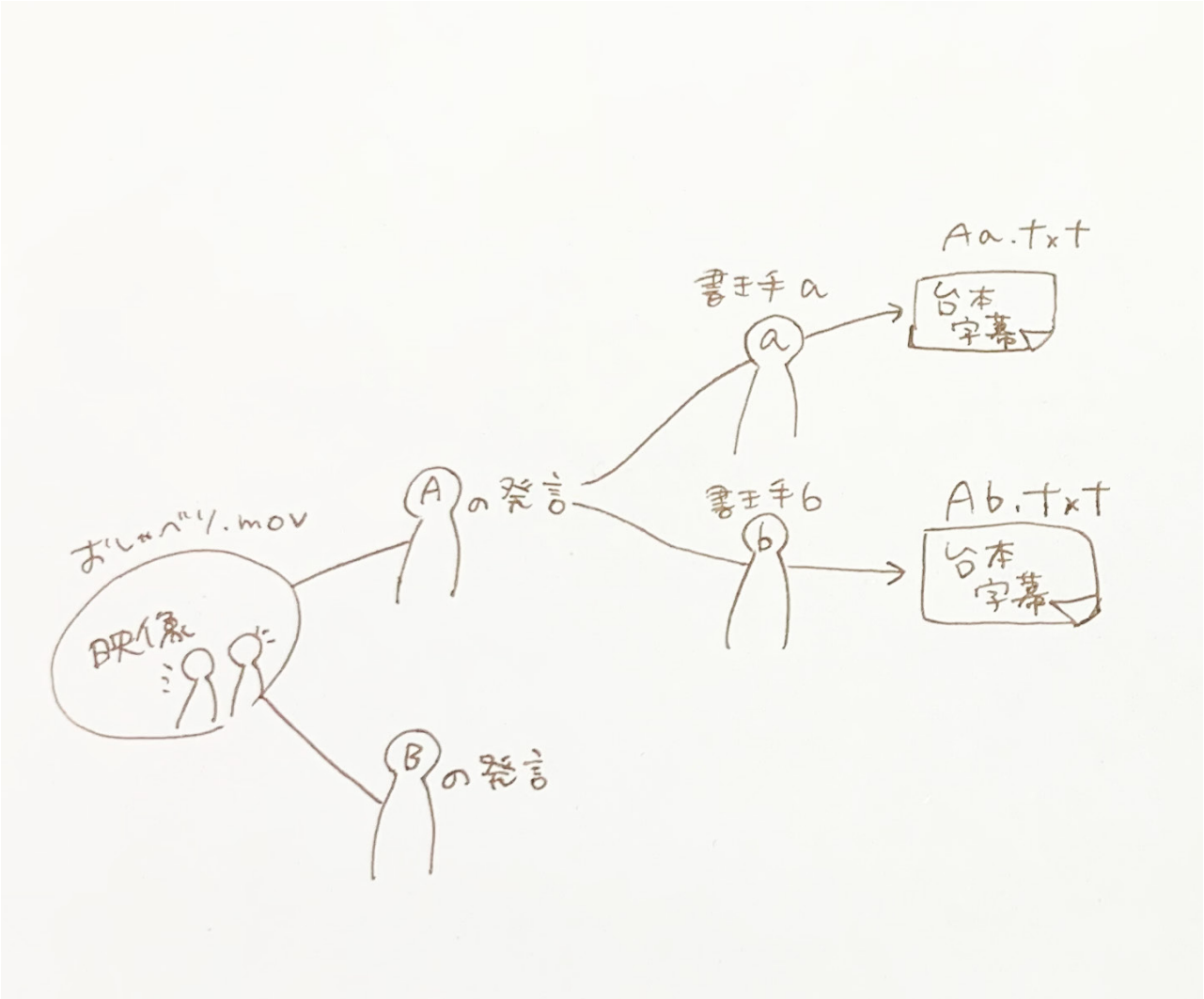
A :　... ンフフ

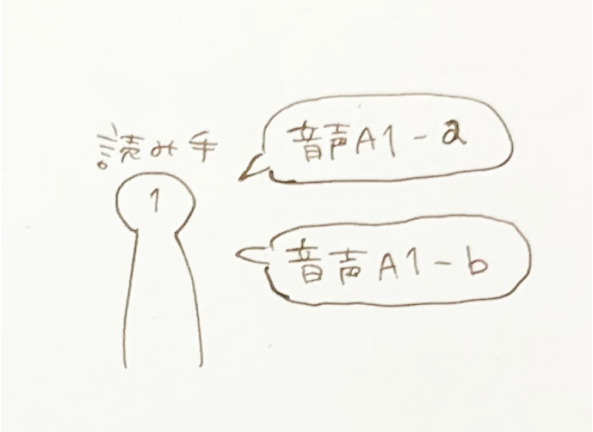
B :　たかちゃんめっちゃ褒めてくれるからさ、
なんか、話ききたくなっちゃう！

A :　褒めるっていうか、まぁなんか、
そういう感じだもん。
そういう感じがするっていう感じの

B :　ツイッターのさ、名前もちょっと ...

《 **話す声が書く文が話すあなたの声が** 》 映像から書き起こされた台本
左：書き手 c によるもの / 右：書き手 d によるもの


おしゃべり.mov
映像
A の発言
B の発言
書き手 a
書き手 b
Aa.txt
Ab.txt
台本
字幕
台本
字幕


読み手
1
音声A1-a
音声A1-b

字幕は、元の雑談を複数の書き手が「普段使っている書き方」で書き起こしたものだ。読み手は元の映像を見ず、「台本だけで読める通りに」読み上げている。

固有名詞や世代、文化のずれによって「聞きとれない言葉」があったり、また「読めない言葉」が書かれたりする。文化的、知覚的なずれが重なり、読み上げはぎこちないものになる。

あなたはいずれ、ここからいなくなる

《「終」についての手紙》

2018 / インスタレーション / 封筒、手紙、1 本だけ残したマッチ箱

展示室の片隅に、封筒が山積みにされている。積み上がった封筒の上には「一人一部までお持ち帰りください」と表示されている。封筒を開けると、中には一通の手紙とマッチ箱が入っている。マッチ箱の中にはマッチが１本だけ入っている。

「終終終〜の終」　展示風景

「終」について

展覧会「終終終〜の終」を見にきてくれてありがとうございます。これは友達に誘ってもらって参加した展覧会で、けっこう気に入っています。だから、みんなの作品もこの手紙も、あなたに見てもらえて嬉しいです。

ところで、今日が何日目かはわかりませんが、どちらにしても、この展覧会は3日間で終了することが予め決められています。展覧会が終了した後､作品はいつかどこかでの再展示を待って保管されるか、または作家個人の元で破棄されることとなります。破棄されることさえなければ、この展覧会のタイトルから解放された作品は､別のタイトルを持った展覧会のためにまた展示され､別の作品と並置されて､また別の言葉とともに誰かと対面することとなります。

作品を鑑賞したあと（またはしながら)、この部屋を出る前にあなたは写真を撮るかもしれません。展覧会が終了すれば、この作品にはもう会えないかもしれない。この作家の名前を忘れてしまえば、もう見つけることができないかもしれない。この展覧会で出会ったことを思い出したいと思うとき、あなたは展示された作品にカメラを向けるでしょう。私はそれを嬉しいと思います。しかし、この部屋、この展覧会であなたがその作品と再び対面することは、あなたがこの3日間のうちに再びこの部屋を訪れない限り二度とありません。やはり、写真に残された作品はコピーでしかなく、作品そのものがあなたの目の前に再び現れることはないからです。いずれにしろ、あなたが作品たちに背を向けこの部屋を出た瞬間に、この展覧会は終了するのです。

本展では作品を販売していません。出展された作品は購入・所有されることなく、おそらく別のどこかに展示される可能性もまだない作品です。もしここに展示されている作品が決まったどこかに居場所を見つけ、里子のようにその場所に居着くこととなれば、そこに行けばあなたはいつでもその作品に出会うことができるでしょう。作品と場所は一つになり、そして何時か、その場所がなくなるとき共に消えることとなるかもしれません。(あの絵のように。)

この展覧会は3日間で終了することが予め決められています。展覧会の終了を以って、作品は（それが叶うかどうかはさておき）次の機会を待つ間眠ることになります。予め知らされた「終」は、その断絶によって存在を印象付けるでしょうか。あなたの目の前からこれらが消えたとき、あなたの記憶からこれらが消えたとき、彼らは。

西村梨緒葉

幽霊は、想像するたび形を変える

《 **コーヒーショップで電話をしたらいけないのは、電話の向こうにいる幽霊のことをみんながこわがっているから** 》
2015 / 映像 (4'15") / 映像、切り貼りされた音声

PC 越しに通話をしている後ろ姿。なにげない雑談をしているように見えるが、よく聞くと、相槌や断片的な返答が並んでいるだけで、会話の内容はつかめない。

通話相手 (a)　：ハハハ、寝てる間に？

：うん〜

通話相手 (a)　：起きないで？

：アハハハ、見たい〜

通話相手 (a)　：顎狙うの悪趣味でしょ

通話相手 (a)　：そう、なんていうか髪型で判断されちゃう

：ハハハハ！

通話相手 (a)　：あーダメじゃん、と思って

：やー、良いっすよそういうの

：フフッ

通話相手 (a)　：なってたけどー、今は分かんないなー

通話相手 (a)　：何フェチなんだろう？

：うーん

通話相手 (b)　：こんな感じ

：専攻科な〜

通話相手 (b)　：すっごい、あの、サーモンを多めに頼んでもらった日で、

通話相手 (b)　：ふぉ〜！ってはしゃいでたら、

：うん

通話相手 (b)　：それでもう、もういらない…みたいな

：今心の支えはなんなの？

しばらくすると、映っている人物の声はそのままで、通話相手の声だけが別の声に変わる。相手が変わっても、映っている人物はそのまま話し続け、会話は続いているように見える。通話相手の声は何度か別の声に変わり、最後には、画面に映っている人物と同じ声になる。話者の識別が困難になっていく。

あなたと私の区別がつかない

ENTP《 Days are in Sync. 》

2017 / ライブパフォーマンス / コンセプトの一部、声を担当 / 10min

テキストの読み上げ、キーボード演奏２人で構成された、３人組でのライブパフォーマンス。ステージ後方に投影されている映像は、それぞれが撮影した、日記的な短い映像素材を集めて編集したもの。パフォーマンスは朝・昼・夜の３部構成になっており、映像の編集も３人のメンバーが１部ずつ担当した。

「ENTP」とは、MBTI 式の性格診断で分類される性格類型のうちのひとつだ。このテストで共通して「ENTP」であると分類された３人による、サウンドパフォーマンスユニット。

（　目覚ましを鳴らす　）
（　あくびをする　）

（　伴奏をはじめる　）

5:12　髪を切りたいと毎朝考えている気がする

6:00　牛肉を食べる夢は吉夢（きつむ）

8:06　己の怠惰さが招いたことだろ

8:46　まだ夢の中みたいだ

8:49　恐ろしいほどの社会体験。

（　テンポを上げる　）

10:48　静かな釣り堀に親子連れ。いつか釣りをしてみたい。

11:04　日光が気持ちいい　冬の晴れが好き

11:16　朝方のクレープを思い出している

（　タイマーを鳴らす　）

11:35　体重 体温 今日も変化なし

12:06　今日は焼き鳥を我慢したのでえらい

12:57　知らない街の知らない公園で昼食を取った。心地がいい。

13:39　移動は楽しい 駅にはたくさんの人がいる

14:02　久々に会う友人達。友人なはずなのに緊張する。

16:46　移動の最中でわずかに感じる安堵と虚無感が天候に相まって心地よい

（　チャイムを鳴らす　）

17:00　宇宙の話をした　ごはんをいっぱい食べた

18:00　上京 2 年目にして初めて雪に触れた

19:45　体力のなさを痛感する、人形のように横たわる。

21:38　布団に潜る 何か他の動物になりたい

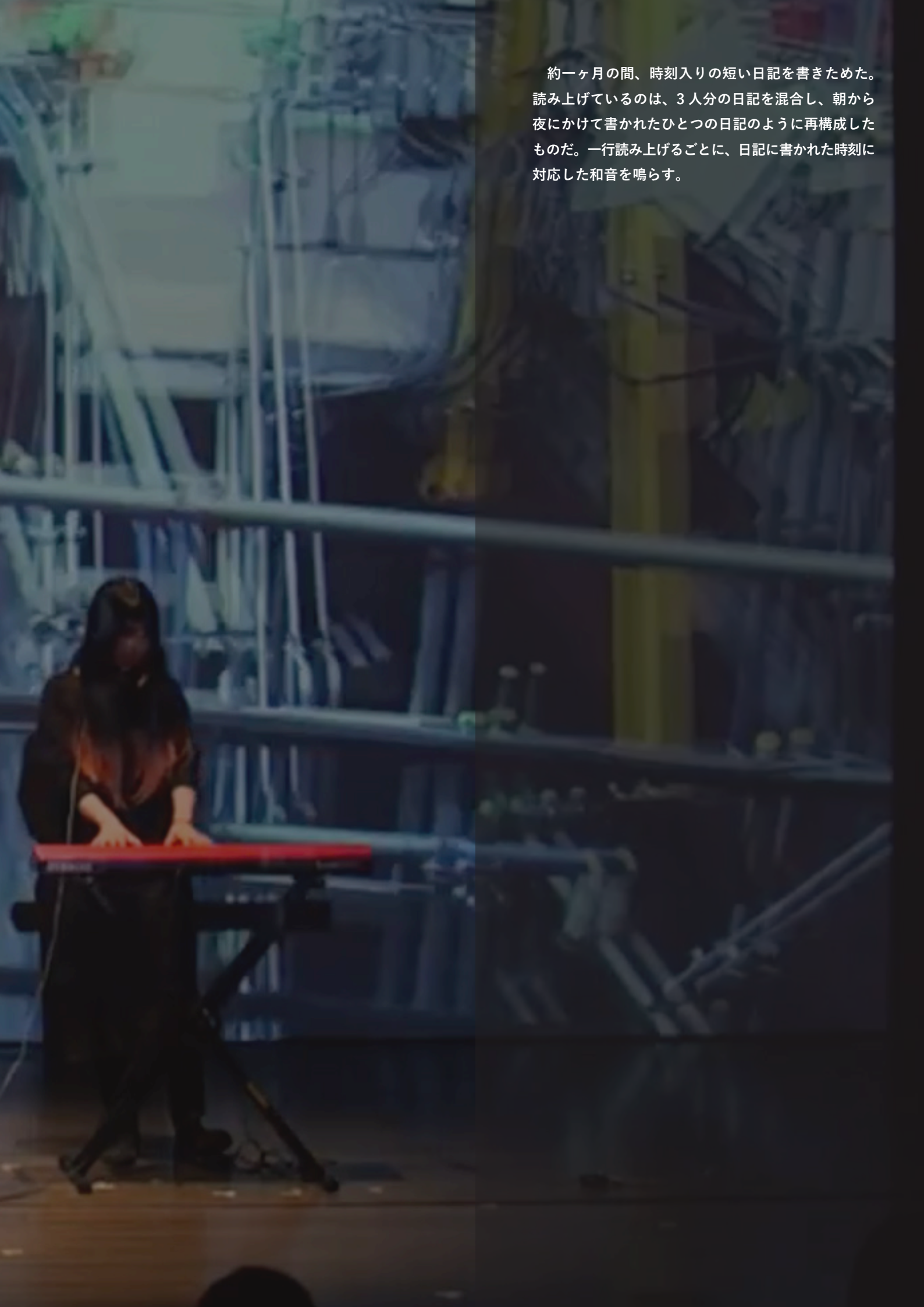
21:53　今からが 1 日の本番のような気がしてくる。

23:11　牛乳は 1 日 333ml

23:13　彼は実在した。まるでロボットや、ホログラムのように、不安定に。

23:48　「解散」を私もしてみたくなった

ENTP《 Days are in Sync. 》
3 人の日記を混ぜたスクリプト



約一ヶ月の間、時刻入りの短い日記を書きためた。読み上げているのは、3人分の日記を混合し、朝から夜にかけて書かれたひとつの日記のように再構成したものだ。一行読み上げるごとに、日記に書かれた時刻に対応した和音を鳴らす。

俳優として空間の物語を読ませる

《 **ばみられたロビー**》
2015 / インスタレーション / 床にテープ

自宅のあるマンションのロビーの床に、演劇などで使われる「場ミリ」を敷いたインスタレーション。立ち位置を示すらしきバツ印やＴ印、物体や人物の移動を示すらしき矢印と点線、なんらかの物体の置き場所らしき四角形などが、床面に散りばめられている。